

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児②⑥

浅田 朋子

双子は小学4年生になり、心も体もぐっと大きく成長してきた。

イタリア語のレベルも上がり、私のイタリア語の間違いをよく指摘してくるようになった。娘のイタリア語の上達はもちろん嬉しいが、自分が情けないような複雑な気持ちになる。苦し紛れに「ママはね、文法はわかってるんやけど、ずっと出てこないんよ！文法は知ってるねん！わからんかなあ、このもどかしさ」と訴えてみるが、「ふーん…」とあまり聞いてもらえない。まあ、ネイティブにはわかるまい…。

特に最近、双子のクラスメイトたちの会話を聞いていると本当にびっくりしてしまう。女の子達は見た目も会話も「もしもし、あなたひょっとして18歳？」と聞きたくなるくらい、おませさんになってきている。もう立派な「女子！」のようである。しかし双子は他の子に比べると会話の内容も態度もまだまだおぼこい感じがあり、親としてはほっとする。体つきも他の女子たちは「むちっ」とした太ももでシナシナ歩いているが、双子は小枝のような細い足で飛び跳ねている。双子の足はあろうことか私の腕とほぼ同じ太さだということが判明して、49歳更年期、泣きそうである。

9、10歳になってくると、服装もみんなそれぞれの個性が出てきて面白い。最近流行りのトップス短め、ピチピチレギンスの子もいれば、60年代からタイムスリップしてきたみたいなヒッピースタイルの子もいる。お母さんは会社の事務員らしいが、

彼女の服装もなかなかのヒッピースタイルで、いつか「社会の中にいる意味がない…」とかつぶやいて、親子そろって会社も学校もやめそうである。また、ある子は「あら、あなた英国王室の方？」と思わせるようなキャサリン皇太子妃のような、かっちりワンピースにストラップシューズを履いて、毎朝美容院に行っておセットしているみたいに綺麗に髪を結んでいる。

腹だしスタイルの子に「お腹、出てますよお～」と冗談で言ったが、真顔で「Quindi? (だから?!)」とキレられた。ややこしい年頃にはあまりしようもないことは言わないほうがいい。

さて、こんなおませで強気な子供たちも、2月になるとソワソワしだす。なぜなら「pagella (成績表)」が発表されるからである。

イタリアの小学校では日本の「通知表」にあたる「Rilevazione dei livelli di apprendimento (学習レベル測定表)」、通称「pagella (成績表)」が、年に2度、2月と終業式前の6月に配られる。配布は保護者にアプリを通じて電子書類で送られてくる。

双子の通う小学校では「verifica (筆記試験)」と「interrogazione (口頭試験)」があり、それが10段階で評価され、成績表に反映される。日本でもそうだが、もちろんこのテストだけでなく、宿題、学習態度などで、総合的に判断される。

「interrogazione (口頭試験)」は教科書の3~4ページほどを暗記して、先生の前で説明し、さら

に先生の質問に答えるのである。丸暗記ではなく、要点を押さえて自分の言葉で全体の要素を漏れなく答えなければいけない。筆記のテストも行われるが、重要なのはこの「interrogazione(口頭試験)」である。

双子は最初この「interrogazione(口頭試験)」が苦手であったが、4年生にもなると自信もつき、うまくこなせているようで、Bクラスの娘は「ママ！また10ローデ(10 lode/賛辞・評価)もらったよ！」と誇らしげに報告してくる。「みんなもね、テストで10点とか9点もらうから、通知表いいだろうなあ〜って楽しみにしてるよ！私もすごく楽しみ！」と嬉しそうである。

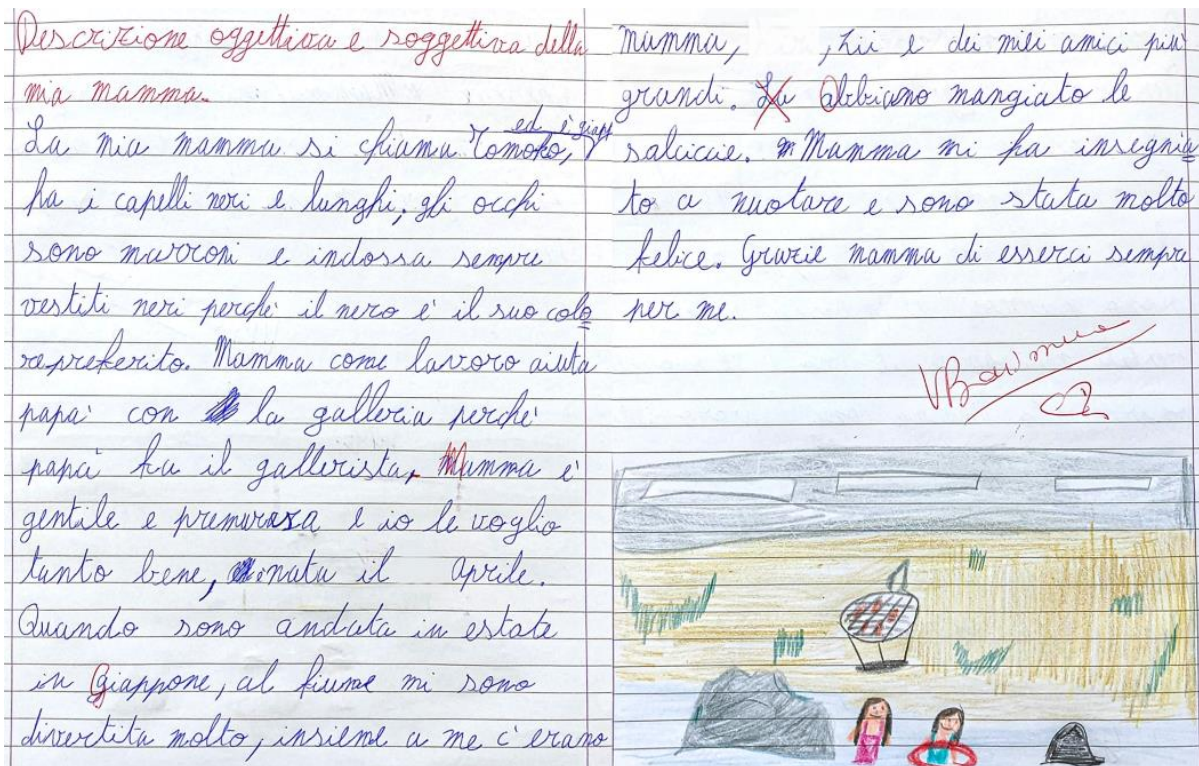
Bクラスの「鬼」と私があだ名をつけたこの担任はとてもスパルタで評価も厳しいが、最近はずっとでかなり良い点をつけてくれるようである。親たちも「あ〜、ようやく普通に子供たちを評価してくれだしたわねえ〜」とホッとしていた。小学4年生くらいになると、親はもちろん子供たちもこの「pagella(成績表)」を気にし出す。娘の仲良しのお友達のフランチェスカちゃんのお母さんも「本当にいい点をもたらしてくるのよ！もうフランチェスカは大喜びで、次の通知表は絶対良いって自信

満々よ！」と言っている。

Bクラスには「アインシュタイン」と呼ばれる秀才のマティルデちゃんがいる。クルクルの明るい栗色の髪をいつも引っ詰めにして、眼力が鋭い。試験はどの教科も10以外取ったことはなく、いつも完璧な答えで授業態度も良く、文字も綺麗で、非の打ち所がないらしい。娘いわくマティルデちゃんは「多分、NASAに入る」らしい。そこはアメリカじゃなくてASI(Agenzia Spaziale Italiana イタリア宇宙開発機関)にしてほしかったな…。頭脳流出はイタリアでも悩みの種である。

「マティルデちゃんは、通知表、どうなのか気にしてるん？」と娘に聞くと「ううん、全然。だって絶対に全部 Avanzato(上級)だから」とのこと。鬼の厳しい評価を承知した上で、どれくらい自信である。

通知表の評価段階は4つあり、Avanzato(上級)、Intermedio(中級)、Base(基本)、In via di prima acquisizione(初歩)となっている。「Avanzato(上級)」が一番高い評価となる。昔は10段階評価だったようだが、2020年にこの4段階評価に変わったようだ。しかし現在、この4段階評価も再び変更の議論がなされているようである。



【Letturaのノート】

通知表の各教科の内容は何項目かに分かれており、その項目ごとに評価がつけられている。

イタリア語では、Ascolto(聞き取り)、Parlato(口頭・会話)、Lettura(文章読解)、Scritto(筆記)、Lessico(語彙)、Grammatica e riflessione linguistica(文法と表現考察)と、6項目に分かれている。

さて、「通知表」発表の日の朝、通学前の双子はソワソワとしている。「通知表」はだいたい午前中に送られてくるので子供たちは授業終了後、保護者が迎えに来る時に教えてもらうことになる。電子書類で送られてくるので、私は家で印刷して夫や娘たちと皆で一緒に見ることにしている。

校舎から出てきて開口一番、子供たちは親に「どうだった!？」と聞いている。「良かったわよ～、頑張ったわね!」「うん、いい成績表だったよ」と双子の片方がいるAクラスは子供たちに明るく教えているが、Bクラスの親の顔が冴えない。「おうち帰ってから一緒に見ようね・・・」「だいたい良かったわよ」とかあからさまにおかしいのである。私もBクラスの娘の成績表を見たが、確かに今回、日々のテストで良い点をとっていたわりに評価は相変わらず厳しかったが、大体いつもと同じような成績であった。「まあ、鬼だからな・・・」と娘も少し残念そうではあったが、鬼の辛い評価はわかっていたので納得していた。

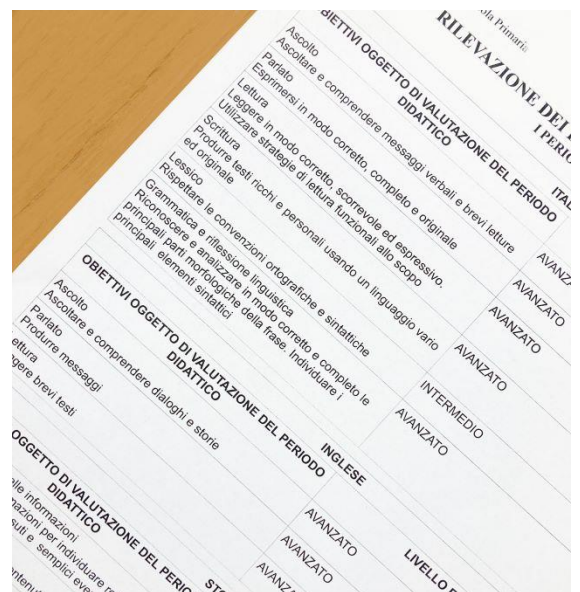
ところが、どうもかなりの生徒が「Base(基本)」をつけられたらしく、Bクラスの保護者チャットが夜になり大荒れし出したのである。「うちの子、もう大泣きよ!!!試験で9点とっていたのになんでBaseなのよ!!!あの悪魔め!」と、そりやもう悪口雑言のオンパレードである。「信じられない、子供への愛が感じられない、良心がないの?あんなの教師じゃない!」「人間じゃない!モンスターよ!!!」「こんな評価、私は認めない!書き直しよ!」と、まさにあんたらがモンスターペアレンツでしょ、と言いたくなるややこしい親たちが一斉にわーわー言っている。見兼ねたクラス代表のお母さんが「通知表に関して先生と面談したい方は、直接先生にメールして相談してください」と担任のメールアドレスを投げた。確かに試験は良かった子が多いが、授業態度、宿題なども見て教師は総合的に判断しているので、いくらテストが良く

ても評価が良くないことだってもちろんある。

「あ～あ～・・・、こんなこと言いに行っても、鬼に一喝されるだけで・・・」と思ったが、こういう親は自分の意見を言わないと気が済まないであろう。先生も本当に大変である。

次の日、Bクラスの娘が学校から帰ってきて嬉しそうに「マティルデちゃんの通知表、どうだったか知りたい?」と私にいうので、「もちろんアインシュタインはオール Avanzato やろ?」というとうん、マティルデちゃんね、今回は体育だけbaseだったんだって!マティルデちゃん、すごく、すごく怒ってた」と言ってニヤリと笑った。毎回、副教科も Avanzato だったマティルデちゃん。高を括り「体育なんてどうでもいいもん」と適当にこなしていたらしい。それを見逃さない鬼、そして「Intermedio(中級)」でもなくバシッ!と「Base(基本)」を叩きつけるあたり、さすがである。

「アインシュタインもやっぱり鬼には敵わないなあ～」と私もおかしくなって娘と二人で大笑いした。



【pagella】

(元当館語学受講生)

勉強機のリクイリツィア

竹田 理乃

旅行の準備で楽しいことはいろいろありますが、お土産の用意は格別です。もしも旅先が馴染みのある場所で、そこにはなかなか会えない懐かしい友だちがいて、日本でなら簡単に手に入れることのできるようなものを欲しがっていると知っていたら、このチャンスは絶対に逃がしたくありません。友だちの喜ぶ顔が見たい。いそいそと「そういえば、今度そっち行くんだけどさ。なんか欲しいものある？」とメッセージを送ってリクエストを待つときの、今からめっちゃ楽しい予定が入るんだぞという期待感がいい。友だちの好きなものを復習できるのも、最近どんなことに興味があるのかをあれこれ教えてもらえるのもいい。インスタントの抹茶ラテは辻利のやつとだけ指定があったけれど、これは大袋3つで足りるのか疑心暗鬼になったり、もの足りなくて勝手にお菓子を追加したり、おすすめの文庫本なんかもスーツケースの隙間にねじ込んだりして、お土産を用意しながら再会を待つのが本当に楽しい。

じゃあ、私が友だちを日本に迎えるとなって立場が逆転すると、なんだか面倒をかけるようでちょっぴり気が引けるのですが、それでも「なにか欲しいものある？」と聞いてもらえれば、しみじみとありがたいものです。去年の暮れ、イタリアで最もお世話になっている友だちが10数年ぶりに来日したときにも、お土産のリクエストを聞いてもらったので、無限に伸びるイタリア関連の欲しいもののリストを前にして熟考を重ね、なんとか重たくなさそうな2つに絞りました。しばらく前から紙の本で読んでみたかった Alessandro D'Avenia の“*L'arte di essere fragili*”という小説が1冊と、留学中に味を覚えた懐かしい Amarelli 社のリクイリツィア(20g)です。ところが、いざ再会してお土産を受け取ってみると、リクエストした2品に加えて、紙袋いっぱいパネットーネやトッローネなど

のお菓子がついてきたあたり、類は友を呼ぶというか、気の合う友だちとは行動も似るようです。



【友だちのお土産でもらったリクイリツィア】

私がもらったリクイリツィア(100g)というのはキャンディなのですが、これを手渡してもらうときに、友だちからちょっと不安げな顔で「本当にコレが欲しいの？」と念押しがありました。それというのも、このキャンディはインターネットで「世界一まずい飴」と検索したときに表示されるフィンランドのお菓子サルミアッキのお仲間だといえば、ピンときて身構えてくださる方も多いのではないのでしょうか。私の友だちも好きじゃないそうです。なお、サルミアッキとは違って塩化アンモニウムは入っていないため、そちらの特徴とされている塩っぽい刺激臭はありません。お味の方は、苦いような、甘いような。ちょっと焦げたような香りがするので、私はカラメルっぽいと感じています。しかしながら、今まで誰にも賛同してもらったことのない感想なので、あまり真に受けない方がいいかも知れません。それでも、クセの強さをサルミアッキと比べれば、リクイリツィアの方がずっと食べやすいかと思われれます。

ちなみに私がどうしてリクイリツァとサルミアッキを比較できるのかというと、留学中の下宿で仲よくしていたスウェーデン人が、北欧のお菓子をいくらでも分けてくれた時期があったからです。はじめましてのタイミングでお互いの食文化について話題が及び、彼女のポケットに入っていたサルミアッキを「吐いてもいいよ」とティッシュといっしょに渡されたところ、ほかのルームメイトが謝りながら脱落していくなか、どういうわけか私だけぺろっと食べきってしまい、なんだか気に入って「もう一個もらえない？」とお願いしたところ、買い物をサボってスパゲティのストックは尽きても、サルミアッキだけには困らない、やたらと喉の調子がいい日々が幕を開けました。

ですが、それも彼女の帰国までのこと。彼女が下宿を出て、饞別に置いて行ってくれた大袋が空になってしまったあと、深刻なサルミアッキ不足に悩む私の前に忽然と現れたのが Amarelli 社のリクイリツァでした。その頃は、日本のスーパーマーケットでもよく見かけられるようになったスイスの Ricola 社のハーブキャンディをよく買っていたのですが、どこかのパールのレジ横でたまたま視界に入った小さな缶のデザインがあまりにもかわいく、いわゆるパケ買いをしたところ、リクイリツァという大当たりが出たわけです。



【Amarelli 社の商品パッケージ】

出典元: <https://www.amarelli.it/en/the-excellencies/>

ことばを覚えようとすると、おしゃべりする機会があれば見逃せませんし、発音練習だってしますから、使い過ぎた喉が荒れがちになります。個人レッスンでお世話になっていた先生に「この本を 1 冊まるごと音読してもらおうことにしました」と指定された Niccolò Ammaniti の “*Io non ho paura*” を書店で買って来たところ、おやっと思って背表紙を定規で測ったら約 2cm もあったときには、これか

ら 230 ページ分の声を出すのかと怖気づいて生唾を呑みました。喉がガラガラになるだけならまだしも、粘膜を弱らせて海外で風邪を引くのも、貴重な留学の時間を寝込んで過ごすのもご免でしたので、当時の私にとってキャンディは心と身体を守るための必需品でした。

キャンディを舐めながら勉強した思い出はリクイリツァのように甘苦くて、喉元を過ぎればいい思い出のような気がしてきますが、私の泣き言メールをブロックせずに根気強く返信し続けてくれた日本人の友だちの美化されていない記憶によると、私はそれなりにキツイ思いをしていたそうです。それはそうでしょう、勉強は嫌いです。勉強せずに賢くなりたいという素朴で普遍的な願望は、イタリアを代表する児童文学作家ジャンニ・ロダーリ先生もよくご存知のところですよ。

日本でも簡単に手に入る『パパの電話をまちながら』という短編集に入っている「学習キャンディ」は、まさにこの願望を満たしてくれるすばらしい勉強法が一般化したある星の教育事情についての小話です。その星では、知識は本ではなく、飲食物として売られているので、子ども達はおいしくなさそうな生物学を飲み渋ってお母さんを困らせたり、夜中にこっそりおいしい歴史学を一気飲みしたりしています。小さな子どもに必要な知識は食べやすいキャンディになっていて、主人公の娘さんがこれをひとつもらったのですが、含まれている知識が地球のものではないため、せっかく覚えた詩を暗唱してくれても地球人にはよく理解できないようです。

勉強したくない気持ちに焦点を合わせた作品といえば、ロダーリの “*Fiabe lunghe e un sorriso*” には、全自動宿題マシンを売りつけにやってくる小人が登場します。お支払いに金銭ではなく使用者の脳ミソを請求されるというのはギョッとしますが、自分で宿題をしないのなら、いったい脳ミソなんてなにに使うのかと指摘されると、いささか返事に詰まります。脳ミソを使う苦勞といっしょに知識を得ることをあきらめてしまえというメッセージは、学校で習うことなんて実生活では役に立たないだとか、そんな資格は仕事じゃ活かせないだとかいう言い方で、私たちの身の回りでもよく聞

かれるように思われます。個人的なところでは「え～、なんでイタリア語なんですかあ～？」と変わり者扱いされるようなことがあると、不安感から脳ミソのなかに蓄えたものの価値を疑いがちです。

そして、そんなことばに接したときにこそ際立つのが、いつも愉快なおはなしで朗らかに肩を支えて「でもね、やっぱり勉強はしましょうよ」と奮い立たせてくれる、ロダーリ先生のかっこいいところです。

小さな人はぼくの脳みそを取って、小さなカバンに入れました。

脳みそがないと、なんて身軽なのでしょう！あまりに身軽で、ぼくは部屋じゅうを飛び回りました。父さんがつかまえてくれなかったら、窓から外に飛び出してしまっていたでしょう。

「これからは、息子さんを鳥かごの中に入れておかないとなりませんね」

(『緑の髪のパオリーノ』より)

脳ミソなしに飛び回ってはいは危ないからです。こうして主人公はカナリアみたいにケージへ入れられるのですが、その狭いこと、苦しいこと、この悪い夢から覚めた途端、自主的に宿題を始めるほどのものでした。

知識がないと危なっかしくてどこにも行けないのだとすれば、私たち外国語学習者はその反対で、学びによってより広い行動可能範囲を勝ち取っていることとなります。たまには挫けることもありますが、会いたい人もいれば、見たい景色もまだまだあります。今は身動きがとれなくても、読みたい本があります。甘いも苦いもおいしいイタリア語の味を知ったうえに、友だちやロダーリ先生の温かな応援を得ているからには、まだ足は止まりそうにありません。

<参考文献>

『パパの電話を待ちながら』 内田洋子訳、講談社、2009年

『緑の髪のパオリーノ』 内田洋子訳、講談社、2020年

(元当館語学講師)

セミナーのご案内

<イタリアの誕生 ～中世都市国家とは～>

イタリアという地名は既に古代ローマの時代から存在していました。

しかし、統一国家としてのイタリア王国が成立するのは19世紀の中頃、ちょうど明治維新の頃に過ぎません。

では、私たちが普通にその名称から思い浮かべる「イタリア」は、またイタリア語という言語は、一体いつ、どのように生まれてきたのでしょうか。

ダンテやミケランジェロはイタリア人ではなかったのでしょうか？

・日 時： 2024年5月25日(土)
10:30～12:30
14:00～16:00
※いずれも同じ内容です

・場 所： 日本イタリア会館 京都本校

・講師： 天野 恵 (京都大学名誉教授、当館理事長)

・定 員： 各回20名(先着順)

・お申込み： 当館ホームページ
電話 075-761-4356

・料 金： 2,000円(一般、現受講生)
1,000円(当館会員)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>